

2019年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

第1問 青年期・現代社会分野

問1 正解は③。

- ③ 乳児が卒乳することを生理的離乳というのになぞらえて、青年が親から精神的に自立しようとする過程のことを、アメリカの心理学者ホリングワースは**心理的離乳**と呼んだ。
- ① 後半の記述が誤り。近代以前には、過渡的な青年期を経ずに、子どもから大人になっていたと考えられている。
- ② 前半の記述が誤り。近代以前には、通過儀礼を経て子どもから大人になっていたと考えられている。
- ④ 青年期に子どもと大人の世界のどちらにも帰属しない状態は、レヴィンによって境界人（マージナル・マン）と呼ばれた。

問2 正解は④。

- ④ 自分の遺伝上の父母について知りたいというのは自然な感情であり、人工授精の技術は、この情報を知らせるかどうかという点をめぐって家族関係が深刻な影響を受ける可能性を高めている。
- ① 着床前診断は、出生前診断と異なり、胎児になる前の段階の受精卵について検査するものである。命の選別をもたらすとの批判があるとの記述は正しい。
- ② デザイナーベビーとは、受精卵の段階で遺伝子操作を施すことで親の望む子をつくる技術のことだが、「日本で法的に認められ」という記述が誤っている。
- ③ 代理出産には、夫婦の受精卵を体外受精の手法で第三者である代理母（ホストマザー）が出産するものと、夫の精子を人工授精の手法で注入された代理母（サロゲートマザー）が出産するものがある。後者の場合には代理母が生まれてくる子の遺伝上の母となるが、前者の場合には代理母と子の間に遺伝上のつながりはない。

問3 正解は②。

- ② 正しい。20～39歳の年代で、ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合は、男性では32%から34%に上昇し、女性では55%から46%に低下した。この結果、男女間の差は23ポイントから12ポイントに縮まった。
- ① 40～59歳の男性は、ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合が、50%から41%へ

と低下している。

- ③ 平成 28 年の 60 歳以上を男女間で比べると、週の半分以上家族と朝食をとる人の割合は、男性の方が女性より高い。
- ④ 60 歳以上の女性を平成 23 年と平成 28 年で比べると、ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合は、77%から 69%へと低下している。

問 4 正解は①。

- ① ステレオタイプとは、偏見や先入観により、一般化できない事柄を過剰に一般化してしまうことである。非論理的な男性も大勢いるため、男性が論理的であると言い切るのはステレオタイプな言明である。
- ② 塩分の過剰摂取が高血圧を招きやすいという知見は医学的に検証されている事柄なので、ステレオタイプとは言えない。
- ③ 電気がない時代に夜の星が今よりよく見えたであろうという推測は客観的に正しいと考えられるので、ステレオタイプとは言えない。
- ④ 「あの人」についての個別の判断にすぎず、過剰な一般化というステレオタイプの条件に当てはまらない。

問 5 正解は①。

- ① 日本は 1985 年に女子差別撤廃条約を批准したが、男女平等の度合いは世界的に低いと考えられている。たとえば世界経済フォーラムが 2017 年に発表したジェンダー・ギャップ指数では、日本は調査対象 144 か国のうち 114 位であった。
- ② 子どもの権利条約は 1989 年に国連で採択され、日本も 1994 年に批准している。
- ③ NPO (非営利組織) やボランティアは民間による自発的活動であるので、それらを「政府が主導する」というのは誤り。
- ④ 「人間の安全保障」は各国に生きる諸個人の貧困や飢餓の問題を最優先に解決することを目指すものである。

問 6 正解は②または①。

- ② 誤文。高度経済成長期に核家族が主要な家族形態となったという記述は正しいが、1990 年代頃からは核家族の割合は 60%前後でほぼ横ばいとなっており、単独世帯の割合が顕著に増加している。
- ① 当初は正文と設定されていたが、次のように大学入試センターの発表があり、誤文とされた。「本問は 4 つの選択肢の中から適当でない選択肢を一つ選択する問題である。選択肢①の「大家族 (大家族) が一般的な家族形態であった。」という箇所について、

高度経済成長期以前において、大家族（拡大家族）という家族形態は一般的であるという趣旨で正文としていたが、構成比率でみた場合、高度経済成長期以前でも核家族の割合が最も高いことから、核家族の方がより一般的であるという観点からみれば、適当でない選択肢となるため、選択肢①も追加で正解とした。

- ③ 正文。今日では、夫婦の形態が多様化するだけでなく、晩婚化や非婚化が進んでいる。
- ④ 正文。学卒後も親元で同居する独身者をパラサイト・シングルという。

問7 正解は④。

- ④ 太平洋戦争前後の時期に活躍した作家・坂口安吾は、終戦直後に評論「墮落論」を発表し、大きな反響を呼んだ。
- ① ヤスパースにとって、死や争いなどは「克服」できるものではなく、また自己に「無限の可能性」など存在しない。むしろ、死や争いなどの乗り越え不可能な「限界状況」に直面することで、有限な自己を包括する「超越者」と出会うことができ、それが実存への目覚めの契機となるとされる。
- ② シュヴァイツァーについての記述。トルストイは第一次世界大戦の前に亡くなっている。
- ③ 文芸批評家の小林秀雄ではなく、政治学者の丸山眞男についての記述。

問8 正解は②。

aには「レヴィ＝ストロース」が入る。構造主義の代表者という点では「フーコー」を入れることも可能だが、「人間を規律化する制度や装置の発達に近代の特徴を見いだす」というbの条件はフーコーにしか当てはまらない。メルロ＝ポンティは現象学の系譜に位置づけられる哲学者。

問9 正解は③。

- ③ ロールズは、利害や価値観の異なる者たちの間でも普遍的な「公正としての正義」について合意できると考えた。この合意が可能であることの根拠として彼が挙げるのが、万人がもつという「正義感覚」である。資料文のなかで、彼は愛し合う者同士が自己犠牲的になりうるということを指摘しているが、これは人が自己利益だけを考えて行動するわけでないということであり、正義感覚に基づく行為も同様でないかと示唆している。
- ① 愛の原理は正義の原理の類比であるから、互いに愛し合うということが正義感覚に基づく行為の条件というわけではない。
- ② 愛する者に対する行為にのみ当てはまる原理は、公正としての正義の原理とは相容

れない。

- ④ 正義の原理に基づく行為は、害を受けることや愛を失うことを辞さないであろうが、ことさらにそうした不本意な結果を欲し求めるわけではない。

問 10 正解は③。

- ③ A の第四の発言および C の第三の発言で、A と C は子育てなどの機能を家族の基準として重視している。他方、それに続く発言のなかで、B はそうした家族機能は社会全体で支え合うべきだと述べている。
- ① A は必ずしも家族における個々人の自由を尊重しているわけではない（第六の発言）し、C が核家族こそ家族形態の標準と主張しているわけでもない。
- ② B は家族そのものを否定することが必要だとまで言っていない。
- ④ C は第二の発言で、家族に血縁が必ずしも必要ないという点に同意している。また B は第二の発言で、同居するかどうかは家族にとって重要でないと述べている。

第 2 問 源流思想分野

問 1 正解は②。

- ② アリストテレスは目的論的自然観に立っており、すべての事物はその潜在的な姿（可能態・デュナミス）から顕在的な姿（現実態・エネルゲイア）へと発展すると説いている。
- ① プラトンは、感覚で捉えられないアイデアだけが真実在であって、自然界の諸事物はアイデアの影にすぎないと論じた。
- ③ ストア派のゼノンによれば、あらゆる事物には理法（ロゴス）が宿っており、人間の理性（ロゴス）はその現れであるとされる。
- ④ キリスト教はユダヤ教を継承する宗教であり、唯一絶対の神ヤハウェが自然界の一切を創造したとする点で完全に一致している。

問 2 正解は④。

- ④ 医療知識を伝えていくという点は資料文の 1～3 行目で、また個人情報他人に伝えないという点は資料文の末尾で述べられている。
- ① 安楽死への協力については、資料文 4～5 行目で否定されている。
- ② 資料文 6 行目で、私生活における倫理的振る舞いの意義について触れられている。
- ③ いかなる目的であれ、患者の利益を考えなくてはならないということが、資料文 3～4 行目で触れられている。

問3 13 正解は②。

- ② 朱子は理気二元論を提唱し、万物のなかに理が内在するとしたうえで、物質世界を気という概念から説明した。
- ① 理は心のなかにのみ存在するわけではないし、気は物質的なものである。
- ③ 理は心のなかにのみ存在するわけではない。
- ④ 気は物質的なものである。

問4 14 正解は①。

- ① 道家の荘子はいつさいの囚われから解放された真人の境地を理想とした。
- ② 仁・義・礼・智・信という五常は、孟子が説いた四徳（仁・義・礼・智）に漢代の儒者・董仲舒が信を加えたものである。
- ③ 五蘊のうち物質的要素は色のみであり、残る四つはいずれも心の働きである。
- ④ 仏教では、心も身体もいずれも滅びゆくものであって、永遠のものは何もないと悟ることで涅槃の境地に至ることができるとされる。

問5 15 正解は③。

- ③ イスラーム教では、単なる内面的な信仰だけでなく、日常生活のすべてがシャリーアによって規律されなくてはならず、そのことが最後の審判で天国へと招かれる条件とされる。
- ① 古代インドにおいて輪廻の捉え方は思想家によって様々だったが、苦しみの連鎖としての輪廻からの解脱が目標に据えられるという点では、自由思想家のうちブッダやヴァルダマーナ（ジャイナ教の祖）は、バラモン教と違いない。
- ② パウロによれば、イエスの死はアダム以来の人間の原罪への贖いであり、神による許しの証であるとされる。
- ④ 墨家は、儉約を旨とするだけでなく、死者を手厚く葬る中国の伝統を批判する「節葬」を説いた。

問6 16 正解は①。

- ① モーセの十戒では安息日に仕事をするのが禁じられている。しかしイエスは、安息日に病人を癒すなどして、形式的に律法を遵守するパリサイ派の人々を批判し、神の教えの真意について問い直した。
- ② イエスは律法が神の意志であるという前提のもとに、無差別的で無償の愛として律法を再定義し、自分は律法の完成のために来たと宣言した。
- ③④ イエスは安息日についての律法を、少なくとも形式には敢えて侵犯した。

問7 17 正解は③。

- ③ イスラーム教では、信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼という五行の実践が求められるだけでなく、神・天使・啓典・預言者・来世・天命の六信への信仰が求められる。
- ① クルアーンはムハンマドだけに下された啓示である。
- ② ムハンマドは神の言葉を預かる預言者であって、救世主ではない。
- ④ イスラーム教ではスンナ派が全体の約9割を占める多数派であり、イランなどに多いシーア派は全体の約1割の少数派である。

問8 18 正解は④。

- ④ 慈悲とは苦しむ衆生を救済するブッダの教えであり、このうち「慈」は与楽の心であり、「悲」とは抜苦の心を表す。
- ① 仏教の慈悲は人間だけでなく、動物などあらゆる生きとし生けるものへと向かうものである。
- ② 儒家の「仁」についての説明となっている。仏教は人間を親疎で区別したりしない。
- ③ 慈悲の実践は大乗仏教で重視されるものだが、上座部仏教で否定されるわけではない。

問9 19 正解は④。

- ④ 前半の記述は第二段落末尾の文、後半の記述は第三段落末尾の文に対応する。
- ① 前半の記述が第二段落の趣旨と相反する。
- ② 後半の記述がおかしい。第三段落では、「他者との関係を結ぶこと」の意義が語られており、他者への依存状態から自己を解放すべきだという記述は、本文の趣旨と正反対である。
- ③ 後半の記述がおかしい。本文で癒しの意義として語られている「つながり」「関係」は、他者に対するものであって、超越的存在との絆は問題にされていない。

第3問 日本思想分野

問1 20 正解は⑤。

- ア 誤文。「真心（まごころ）」とは、道理によって知的に神を理解する心ではなく、感情をありのままに表現する心である。
- イ 正文。私心のない透明な心のあり方が、古代日本人の理想とした「清き明き心」である。
- ウ 誤文。「正直」とは、善悪にとらわれず、嘘偽りがない純粋な心のあり方である。

問 2 21 正解は③。

- ③ 栄西は禅宗の一派である臨済宗の祖であり、鎮護国家思想をもつ点で同じ禅宗でも、曹洞宗の祖・道元とは異なる。
- ① 奈良時代に唐から招聘された鑑真についての記述となっている。
- ② 『立正安国論』は日蓮の著作である。
- ④ 「南無妙法蓮華経」と唱題することを説くのは日蓮であり、この部分を「南無阿弥陀仏」とすれば正しい。

問 3 22 正解は②。

- a 「無常」が入る。空欄の直後が「…であるとみなしつつも」と続き、「武勇が……後世に語り継がれることを信じた」とまとめられているため、「後世に語り継がれる」とことと相反するこの世への見方を入れればよい。
- b 『葉隠』が入る。「武士道と云は、死ぬことと見つけたり」は佐賀藩士・山本常朝の著作『葉隠』にある有名な言葉である。『自然真営道』は安藤昌益、『翁問答』は中江藤樹の著作である。

問 4 23 正解は④。

- ④ 誤文。江戸時代に生じた美意識「いき」は、「武骨で垢抜けない素朴さ」ではなく、垢抜けた洗練さを特徴とする美意識である。
- ① 正文。「幽玄」は能楽を大成した世阿弥が『風姿花伝』のなかで理論化したことで知られる。
- ② 正文。「さび」は松尾芭蕉の俳句の特徴とされる美意識であり、孤独の中に趣を見いだす境地である。
- ③ 正文。「つう」は、人情の機微などに通じ、服装などが洗練されている様を表す美意識である。

問 5 24 正解は①。

- ① 資料文 2～5 行目の記述に対応している。
- ② 主君の心に偽りがあった場合に行動が正しいものとならないという記述は資料文にない。
- ③ 資料文では、主君の心に偽りがあった場合には、主君が正しいことを命令しても、周囲は結局その命令を守らないとされている。
- ④ 1 文目がおかしい。資料文では、主君の心が真実であったならば、その行動は必ず正しいものとなるとされている。

問6 25 正解は②。

- ② 幕末の尊王攘夷運動に影響を与えた吉田松陰の一君万民論についての正しい記述である。
- ① 本居宣長の弟子を名乗った国学者・平田篤胤（あつたね）についての記述となっている。吉田松陰は仏教には批判的だったが、陽明学からは深い影響を受けており、儒学を排除しようとしたという記述は誤り。
- ③ 会沢正志斎は江戸時代末期の水戸藩士。「大義名分論」という概念を基に尊王論を核とする水戸学を確立したことで、幕末の尊王攘夷論に影響を与えた。「公武合体論」とは幕末の危機にあって幕府と朝廷の協調を目指す立場で、倒幕に傾く尊王攘夷論とは相容れなかった。
- ④ 会沢正志斎は攘夷論の立場であり、西洋文化の受容に積極的であったとはいえない。

問7 26 正解は④。

- ④ 内村鑑三は日清戦争については当初肯定的であったが、その後戦争の悲惨さを深く認識するに至り、日露戦争で非戦論の論陣を張った。
- ① 新島襄ではなく内村鑑三についての記述。
- ② 「脱亜論」の部分だけ正しくない。脱亜論を説いたのは新渡戸稲造ではなく福沢諭吉である。
- ③ 植村正久ではなく新渡戸稲造についての記述。

問8 27 正解は①。

- ① 西田幾多郎の考えた「無の場所（絶対無）」とは、有に対する無という単なる「相対無」ではなく、有と無の対立を可能にする場所を指す究極の概念である。
- ②④ 西洋哲学に伝統的な二元的思考を批判したのが西田幾多郎である。
- ③④ 西田によれば、現実世界には矛盾や対立が存在するが、それらは矛盾や対立しつつも統一している。

問9 28 正解は③。

- ③ 最終段落の第一文にある通り、日本の先人たちは、心と行為が不可分であることを強く意識してきた。そのことは、第二段落で触れられている中世の武士や、第三段落で触れられている幕末の志士についても当てはまる。
- ① 朱子学者の説明が荻生徂徠の説明になっている。また、心そのものより行為を重視したという記述は、本文の趣旨に根本から反している。
- ② 道元についての説明がおかしい。道元は坐禅そのものが悟り（修証一等）だと考え、

単なる手段とみたわけでない。行為よりも心を重視したという記述は、①と逆の意味で本文の趣旨に反する。

- ④ 荻生徂徠についての説明が朱子学の説明になっている。

第4問 西洋近現代思想分野

問1 29 正解は②。

- ② ルネサンス期の政治思想家・マキャヴェリは、政治は力に基づくというリアルな認識から、君主は場合によっては非道徳的な手段をとることのできる人物でなければならないと論じた。
- ① プラトンの理想国家論についての記述。
- ③ 社会契約論者のロックらによって批判された王権神授説についての記述。
- ④ 社会契約論者のホッブズの思想についての記述。

問2 30 正解は④。

ア 「市場のイドラ」についての説明。経験論哲学のベーコンは、経験的知識を獲得する際に注意すべき点として、四つのイドラを挙げた。このうち市場のイドラとは、言葉を介して誤った認識が拡散してしまうものである。「種族のイドラ」とは人間という種族に共通の偏見であり、目の錯覚などが挙げられる。

イ 「洞窟のイドラ」についての説明。人は自分の境遇や環境に固有の事柄を一般的に正しいと思い込んでしまいがちである。これが洞窟のイドラである。「劇場のイドラ」とは伝統や権威を盲信することであり、信頼する知識人の発言に無批判的になってしまうことなどが挙げられる。

問3 31 正解は⑥。

- a 「白紙（タブラ・ラサ）」が入る。「繊細の精神」は、神などを知的に直観することを指すパスカルの概念である。
- b 『『モナドロジー（单子論）』』が入る。ライプニッツは、世界を構成する無数の非物質的な実態のことを「モナド（单子）」と呼んだ。『省察』はデカルト、『エチカ』はスピノザの著書。

問4 32 正解は②。

- ② ヘーゲルによれば、世界史とは自由の意識の進歩の歴史であり、諸個人を超えた絶対精神が、「理性の狡知」を働かせて、歴史の舞台で活躍する英雄や名もない個人を利用しつつ、自らの意図を実現させていく物語である。

- ① 道徳は人間を内側から規制し、法は人間を外側から規制する。
- ③ 「法」と「人倫」を入れ替えれば、正しい記述となる。
- ④ 絶対精神が操るのは諸個人であって、国家同士を争わせるわけではない。

問5 33 正解は④。

- ④ 資料文では、人生には意味も目的もないとして偶然性を強調する永劫回帰の思想と、そうした無意味な人生を全面的に受け入れるべきだとする運命愛の思想について説明されている。
- ① 偶然そのものが運命なのではなく、人生に大きな意味をもつ偶然が運命とされている。
- ② 運命を単に偶然のものだとするのではなく、それを自ら意志したとすることによって運命を愛し、自らを救うことができるとされている。
- ③ 偶然はめったに起こらないものばかりでない。また、運命を愛することが大切だとされている。

問6 34 正解は④。

- ④ 誤文。実存主義の哲学者サルトルによれば、モノと違い、人間は自らの本質を自ら選択し、創造する存在だとされる（実存が本質に先立つ）。
- ① 正文。積極的に全人類への責任を引き受けることを、サルトルはアンガージュマンと呼んでいる。
- ② 正文。サルトルによれば、事物はその本質があらかじめ与えられている（本質が実存に先立つ）が、人間は自らの本質を自ら創造する（実存が本質に先立つ）。
- ③ 正文。サルトルによれば、人間はどのような状況であっても選択肢を自由に選ぶことができ、その結果に責任を負わなくてはならず、このことは「自由の刑に処せられている」と表現される。

問7 35 正解は①。

- ① 『種の起源』を書いたダーウィンは、神が人間を創造し、その後に他の種を創造したという聖書の自然観を否定し、人類を自然選択による進化の帰結として位置づけた。
- ② ダーウィンは生物の進化を説くことで、西洋のキリスト教的自然観を大きく揺さぶった。
- ③ 「軍事的指導者が支配する社会」が誤り。スペンサーの社会進化論は、軍事型社会から産業型社会へと社会が発展すると説く。
- ④ 適者生存のメカニズムは統制されるべきでなく、放任されることで、よりよい社会

が実現するとされる。

問 8 36 正解は①。

- ① 「やむなき運命に抗う立場」については第二段落で、「運命を自らのものとして引き受ける立場」については第四段落で述べられている。
- ② 後半の記述が誤り。運命を最善のものとみなす立場にせよ、それを自らのものとして引き受ける立場にせよ、個人の不運が自動的に解決するとは説いていない。
- ③ 運命を最善とみなすライプニッツやヘーゲルの立場は、悪しき出来事が最善の運命に転換できると説くのではなく、悪しき出来事が悪しきままであっても全体としての世界が肯定できると説くものである。
- ④ 運命の行く末全体をあらかじめ見通せるという信念が見いだされるのは、運命を最善のものとする立場だけである。